

額賀 美紗子・藤田 結子 著

『働く母親と階層化：
仕事・家庭教育・食事をめぐるジレンマ』

(勁草書房、2022年9月、240頁)

井田 瑞江



本書の問題関心は、(1)「新自由主義的母性」が称揚される中で、子育てをしながら働く女性たちは仕事、子育て（特に家庭教育）、家事にどのような意味づけをし、そのダブル・バインド状態にどのように対処しているのか、(2) 女性たちのそうした意味づけや対処法に、階層差はどのようにあらわれるのかの2点にある。これを、子育てをしながら働く女性55名へのインタビューデータから明らかにしていく。本書はⅡ部構成になっており、第Ⅰ部（第1章～第3章）では主に育児・家庭教育に注目し母親業と仕事の間のジレンマを考察し、第Ⅱ部（第4章～第6章）では稼得役割と職業役割をめぐる意味づけと家事について考察している。

第1章では先行研究で指摘されてきた性別役割分業意識や子ども中心主義に対する女性たちの順応と抵抗について考察している。女性たちは子どもが小さいうちから働いているという自らの現実を肯定的に受け入れ、「三歳児神話」に抗うロジックを作り出していた。そして、時間負債を緩和するために母親業と仕事を織り合わせるさまざまな戦略（「子ども優先・仕事セーブ」「子どもと過ごす時間のクオリティを意識する」「手抜きをする」「働く理由や姿を子どもに伝える」）を編みだしていた。

第2章では女性たちの家庭教育への意味づけと実践を「親が導く子育て」と「子どもに任せる子育て」という理念型に分類し、女性たちの就業意欲との関係について分析している。親の時間、労力、費用を伴うコストが高い「親が導く子育て」は大卒女性に、「子どもに任せる」子育ては非大卒女性により多く実践される傾向が見出された。働く女性たちの間には、動員できる資源の差がみられ、階層差を反映した子育てタイプのゆるやかな分化が子どもの就学前から起きていることが明らかになった。

第3章では家庭教育に父親がどのようにかかわっているのかを、「親が導く子育て」と「子どもに任せる子育て」の分類をさらに掘り下げて考察している。対象者家庭における子育ての父母での分担をもとに、家庭教育のタイプは父母協働志向の「親が導く子育て」、母親に偏った「親が導く子育て」、父母協働志向の「子どもに任せる子育て」、母親に偏った「子どもに任せる子育て」の4つが抽出された。現代の日本社会では「教育する家族」が一般化していると言われているが、その内実は一様ではないのである。性別役割分業や父親の権威を再生産するジェンダー秩序の影響は、父母協働志向の子育てにおいてもみられた。大卒の女性たちには日々の交渉の中で夫を子育てに巻き込み、時間負債を緩和し、夫婦で共に子どものケアや家庭教育に携わる傾向が見られた。非大卒女性には夫を子育てに巻き込むことに関して様々な障壁があり、子どものケアと家庭教育を1人で負担していた。こうした母親の負担と葛藤の格差は、子どもの教育格差の形成と連動しており、子どもの就学前から生じていることが明らかになっている。

第4章と第5章では、育児期に就業する女性たちが稼得役割と職業役割をどのように意味づけているのかを大卒女性と非大卒女性に見られる階層差に着目して分析している。大卒女性には、生計維持分担をしようとする傾向や、キャリアとしての職業役割を重視する様子がみられたが、大卒層においても家事育児分担は妻に偏っているケースが多かった。

本書では、非大卒女性のうち高卒と専門学校卒を分けて分析を行っている。高卒女性たちは自分の職業を「ジョブ」とらえているのに対して、専門卒の女性たちは「キャリア」ととらえる傾向がみられた。専門卒女性たちは、妻の生計維持役割分担意識が高くキャリア志向がみられ、同じ非大卒であっても高卒女性とは異なる意識を持つ傾向があった。収入という資源は、家事育児時間を夫と交渉し、外で働くための時間を捻出し、さらに夫や親族の実質的サポートを得てキャリアを形成しようと試みなければなかなか増えないものである。このことは、家事育児分担の平等化に貢献しうる要因として家計の分担という側面を検討する必要性を示唆するものである。

第6章では育児期に働く女性たちがどのように食事の用意を意味づけているのか、階層化により女性間にどのような差がみられるのかを考察している。女性たちは子どもの好みや健康、食べやすさを重視しており、食事の用意にも「子ども中心主義」がみられた。また、子どものために愛情を込めて食事を手作りすべきという「手作り規範」を、非正規雇用の女性は肯定的に捉える傾向があり、「手作り規範」の相対化や対処戦略にも階層差が見出された。就業している女性たちは労働時間と手作り規範の板挟みで葛藤しつつ、世帯収入が高ければ健康的な調理済み食品を購入したり、食材宅配サービスや調理家電によって時間を節約して手作りしたりしていた。他方、世帯収入が低い場合はそういった手段は採れず、安価な調理済食品や手軽に食べられ栄養がありそうな食材を活用していた。

多くの先行研究の知見を用いた筆者たちの丁寧な分析から、女性たちは子ども中心主義を強く内面化し母親業を遂行している一方で、伝統的な母親役割への抵抗も見出された。女性たちは家庭教育でも食事でも個人的戦略を編みだしていたが、戦略の成否は家族の階層を反映した資源の多寡に依存する。したがって、仕事と母親業を織り合わせる資源が非大卒女性の間で圧倒的に不足しているというリアリティが本書によって明らかにされる。働く母親たちにはジェンダー秩序を打破しようとする意志がみられ、「働く母親」である自身をポジティブに意味づける行動がみられた。その一方で、子ども中心主義との葛藤も生じており、「親が導く子育て」のための時間と労力の負担感が女性たちの就業意欲にブレーキをかけることにつながっていた。特に非大卒層で時間負債や葛藤が緩和されていない。手作り規範を相対化しにくい非正規雇用の女性たちや、経済的に外部化が難しく日常的なサポートが得られにくいひとり親世帯の場合には対処戦略も限られる。ジェンダー不平等の構造を変えないまま、「新自由主義的母性」イデオロギーのもとで女性に仕事も子育ても押しつける日本の構造的な問題を解決するには、非大卒の女性とその配偶者である男性たちのリアリティに迫るさらなる研究が必要であろう。

(いだ みずえ 関東学院大学教授)